
勘違いの產物～らぶらびりんす～

れみどれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勘違いの產物～らぶらびりんす～

【ZPDF】

Z3360M

【作者名】 れみどれ

【あらすじ】

卒業式の季節。 一つの純粋な思い・・・

「・・・めっちゃ失礼なんだけども」

「よかつたら付き合つてくれない?」

そう言つたのは、卒業式の前日
しかもパソコン越し。チャットでだつた。
skype。みなさんご存知の誠に便利なツールを使い、彼はそ

う言つた。

彼の名前は、零射。そしてその相手の名前は咲であった

「え・・・じょーく?」

「冗談だよね?」
平仮名打ちで相手がそう答える
平仮名、と言うかわいらしさが彼の心をくすぐつた
んな訳ない。と否定すると、もう一度彼女は確認をした

と。だが零射は変わらず、違つ。と言い続けた
そこから、沈黙が始まつた

零射はその間、パソコンの前で一人冷や汗を流していく

「(いくらなんでも・・・急すぎたか)」

「(俺・・・終わつたな)」

何故こうなつた。彼は自問自答し、今一度振り返つた

・・・そう、あれは卒業式の前日準備。会場設計の時であった

「おー、ちょいクラスの女の子にランク付けしようぜ」

そう言つたのは零射のクラスの友達。ノーブルであったノーブルと零射は互いに照れ臭い・・と言つた感じだが、親友と言つても過言ではない仲であった

ただ、互いに少しばかり歪んだ趣味で共鳴したのは今となつては笑い話である

その歪んだ趣味の一つが、ノーブルの一言である
卒業式の式場準備。彼らが当たつていたのは紅白幕の取りつけであつた

だがそれは一人の仕事が面倒。ならば早く終わらせよう
と言つプラス思考で他の準備班よりも早く終わった
仕事が終わり退屈したノーブルは指揮者が登る階段状の台上に座つて
零射にそう誘つたのだ

完全に一人の世界が始まった。

基準は足。

スカートの下から覗けるそのシャープなラインは最高
特に黒のタイツに包まれたあれは・・。と熱烈に一人は語つていた。

その結果、次々とランクを付けるノーブル
零射はそれに対して、半笑いで答えたり、共感したり・・。と友人の話に対する普通の反応をしていた
だが、それはある一人の子をノーブルが指した時点で変わった

「やっぱ・・咲かな。余裕で上の上だ」

上の上。それは、基準のランクの事である。
下の上、下の中、下の上・・と。じぐじぐ一般的なランク。

その中でノーブルは咲を最高基準にしたのだと零射はその時、ひきつっていた

「・・・ おい、どうしたし零射」

我に返つた零射がいつも通りの笑顔に戻す
そして、ノーブルの判定を肯定した
その後も、二人は何人かを判定した後・・ノーブルがいきなり飽きた。
と一言言つた

そして続けて、とんでもない事を言い出した

「おつけ・・・。 次は男▼e「だな」

「?！」

と、いう事で今度は男を判定する事になつた
まずは体育館を一人で出ると、彼らの友人一人が目に止まつた
一人は野球部のオン。 そしてもう一人はカイ。 であつた
二人の手には大量のガムテープ。 会場設計で使うのだろう

「てめーら・・仕事は・・」

オンがそう言うとノーブルは自慢氣にもう終わつた。 と切り返した
その後ろで何故かカイはニヤニヤしていた。

オンが舌打ちをして、俺らはまだ仕事だ。 と言つて体育館の中へ
と入つていく

その背中を見たノーブルと零射は、見事なハモりを利かせてある言葉を言い放つた

「「上の上・・・・」」

そう、二人はイケメンだったのだ

まずはオン。彼は野球部・・しかもキャプテン。

と運動神経が

抜群

ついでに学年委員長も勤め、性格もよい。拳句の果てには年上の彼女までいるモテ男。リア充なのだ

零射はそれを嫉妬感タップリで、いつもネタにしていた

次にカイ。彼もイケメンである。

彼女は居ない・・が運動神経は抜群

そして何より・・彼にはユーモアセンス。一言で言うと面白いのだ

女の子から見ると、それはとても好印象。

が、男・・零射やノーブルから見たらただの馬鹿であつた
悩ましい事に、彼はモテたくもないのにこの学校一番の不細工とも言える女子から好かれている

それを三人はネタにし、日々笑っていた

「次は・・お前だ」

ノーブルがそう言う

そう、零射が判定の対象となつたのだ
すかさず零射が口を開く

「余裕で下の・・」

「自虐は無しだ」

肩に向け、思い切りパンチを入れる

丁度筋に入った、零射がぐあつ。とみつともない声を上げた

そしてノーブルが前髪をいじりながら零射の発言に対し、舌打ちをして不機嫌そうに口を開きはじめた

「ばつか。お前は以外と・・・

「おい、お前ら一人・・・

零射にとつて良い発言は、彼らの担任によつて遮られた
ノーブルは首根っこを掴まれ、思い切り握られていた

「手が開いてるなら、他の人をてつだえ！」

そう言つて、ノーブルが連れて行かれる
逃げても無駄だ。一年間の担任との付き合いで零射は悟つていた
のか、大人しくその後を突いて行つた

その後、バック絵・・体育館の絵を張る。とか言うのだが結局、
人数が多くすぎて邪魔の為、零射・ノーブルは担任の監視の下、当日
吹奏楽部が演奏する場所の椅子で座つていた
その回りには徐々に女子も集まつてきていた

「ね～零射～。髪の毛たつてるよー

「ほつとけ」

零射の髪型は見事にキマつていた

ワックスでも付けて居るのではないか？ そう錯覚させるほど髪型は
荒いものだつた

整髪剤は付けて居ない。が、故意にやつたものだ
多数の女子からもそれを言われるが、彼は朝寝坊して、急いで走つ
てきたら風でこうなつた
と、適當な答えを出していた

が、実は朝寝坊などはせず、登校時間の3時間前にはきつちりと起

きていた

丁寧に朝シャンまでしてドライヤーで丁寧にセッティングしたのだがそれを知られるのは恥ずかしいので零射は適当に答えていたのだが次第に集まってきた女子に髪をいじられ、零射はぐあああ。ともがいていた

「あー もつてもてじゃん 」

そう言つたのは咲であつた

その瞬間、零射の動きが完全にとまり、足搔くのも完全停止した僅か一秒ほど。はつと我に返つた零射がほつとけ。むしろ助ける。と咲にそう言つた

もう分かるだろう・・完全に零射は咲に惚れていたのだそれはいつごろか・・。零射が彼女と別れたあたり? 理科の授業で咲が自分の後ろになつた時?

未だに理解、分からなかつた。
なんとも言えない・・が・・ただ、好きになつていた。 それだけである

「零射、いる?」

スカイプの着信音。 U・N・オーエンは彼女なのか。 が流れた

のは零射の告白から30分後だった

沈黙は20分近くも続いていたのだ

零射がキーボードを素早く叩き、いる事を証明する

そして一度スカイプのウィンドウを閉じて、自分のブログへと向つた心臓の高鳴りが自分でも感じられ、マウスのポインタが自然と揺れていた

＼＼＼＼＼

オーランの着信音がもう一度鳴る

それと同時に脈拍数が一気に上がった

ドクン・・ドクンと波打つ心臓。それに反応し僅かに震える腕で

マウスポインタを移動させた

スクリーンの下の方に表示されるskypeの文字を一度クリックする

”頼む・・・・・。kと言つてくれ”

それだけを願つてクリック、・・・画面が開かれた。

同時に零射が一気にチャットの欄を見つめる

そこに書いてあつた文字を見ると同時に・・・え？と零射が言った

何度も何度も読み直す、そこに書いてあつた答え。それは”Y

es”でも”No”でも無かつた

「返事・・明日でもいい？」

「直接の方がいいから・・・」

その言葉がそこに写し出されていた

キーボードを再び膝の上に置き、タイピングを始める

軽快な力チャカチャ音が終わると、エンターキーを一回叩く音がそこに響いた

一回目は変換の確定

そして一回目と同時にチャットが発信される

「ああ、分かつた」

それを了解した零射がそう言つと、咲はうん。と返事をした

その後、咲は風呂に入る。と言つてskypeからログアウトしたのだった・・・

「・・・う、うああああ集中できねえええ！」

零射が自室のベットの上で漫画を読みながらそりゃうした漫画をバタン。と閉じ床にそれを放り投げた
すると放り投げた漫画・・・BAD BOYS 15巻の1ペー
ジがそこに広がつた

そこに書かれていた一つのセリフ。

それは・・・

”惚れた女の本当の幸せを考える”

零射がそれを見ると・・・ふつ。と溜息と小さな笑いをそこに吐いた
本当の幸せ・・・俺なんかで良いのだろうか。

不吉な事が次々と頭の中を廻る中、零射はコンポの電源を入れた
そこから流れる音楽。それはヒルクライムの春夏秋冬であった

「今年の春はどう行つたか？ 今年の夏はどう行つたか？」

その歌詞が響くと零射の心が少し和らいだ
いつか・・いつかきっと・・一人でデートとかもしたい
もし付き合つたら、俺もケータイかつてメール漬けだな・・・
と、幸せの日々を想像している内に、彼は眠りについてしまつた

翌日。結果を聞ける、卒業式の日であった

卒業式の日にも関わらず、彼は早朝からPCを開いていた
そしてskypeを開く

咲一オフライン

「・・・」

それを確認するとtwitterを開き、今起きた。と書き込む
すると零射は数々のbotに返答された
学校に行つてくる。卒業式だ。そう書き残し、彼はPCを閉じ
ようとした
その時だった

（　　）

オーランの着信音。skypeを開く。

The n=禪・学校一緒にいかね？

その一言が追加されていた

僅かな期待は崩れさり、溜め息を吐く
ああ・・分かつた。と了解の印を送り、彼は学校への準備をし始
める

8:25分。神社の前で。それが決まると彼は家を後にした・・

学校へ行く途中、神社で禪。そして友人である紅が彼の元へと来た
そして、今の零射の状況は一人へと打ち開けた
二人は零射の友人で、小学校からの付き合いであった
だからこそ、零射は今の自分がどういう状況なのかを説明できたのだ

「昨日さ・・咲に告白してみた」

禪がニヤニヤしながらそうか・・と答える

零射がそれを見ると、維持を張つて必死にフラれる前提の話をした
これは、フラれた時の言い訳。俺が言つた通り、フラれたろ?
と言つた感じでイジられるのを逃れる為であった

「くそつ・・俺の中で90パーの振られる・・つて心と10パーの
もしかしたら・・つて言つのが戦つてる」

と、意地を張るが、実際はほぼ確実に告白がOKされる。 と思い
込んでいた

直接の方がいい。 つまり、直接OK。と伝えたい
と言つ事だろう。 と勝手な想像をしていたのだが
だが、彼の友人らもそれには反対はしなかつた
むしろ、直接お前に無理。 つて言うのもおかしいわな。
と零射を応援するが如く、そう言う始末である

学校へ着くとすぐさま零射は辺りを確認した
・・・咲がどこにいるか?

何故だ。 学校に行く前までは咲に一刻も早く会いたい。
その気持ちが強かつた。 だが・・今となつては咲と会いたくない
これが・・・照れか・・。 と零射が自分でも気持ち悪い感覚に襲
われていた

「あ、咲だ」

友人の紅がそう言つ。 それと同時に零射はごく自然な風に視線を
外側に向けた

見間違ひだつた。 その言葉を聞くと同時に、視線を前方へと向けた
外靴から上靴に吐き変えると同時に、零射の左足が紅の左わき腹に
直撃した

ぐふつ！ とベタな声をあげ、わき腹に手を押さえる
紛らわしいんだよ・・！ と照れながら零射は一人で教室へと向つ

た・・・

卒業式。本当にめんどくせえ

零射の隣からその呟きが聞こえた

卒業証書が授与されている時であった。

式も終わりへと近づくにつれ、卒業する三年生の表情が歪んでいった

・・・涙を流すものは当然いた

何故涙を流すのか。それを零射は来年身を持つて知る事を悟つて
いた

そして、式は終了した。

卒業生が一斉に起立し、列となつて体育館をゆっくりと歩く

普段厳しい表情しか見せない先生もつい涙を見せてしまっていた

それを零射は物珍しげに半笑いで見ていた

そして卒業生の行列を追う様に目線を移動させた

体育館の入り口近く・・そこには10名ほど一年生が居た

卒業おめでとうございます。一人一文字を持って、それを提示して
いたのだ

その一番端・・丁度零射の真後ろ辺りに居たのはなんと咲であった

「(へえ・・咲も持つて・・)」

咲の顔を覗いた

その時、零射は啞然としてしまった

咲の顔には・・涙が浮かんでいたのだ

咄嗟に零射は前を向いてしまった

「(へ・・・?!)」

惚れた女の涙なんぞ見たくない。彼のナルシスト的な何かが反応してしまったのだ

そこからは田線をずっと下へと向けていた・・・。

式が完全に終了すると、一年生は三年生へと椅子を運んでいた教室は涙の大洪水で一年からすれば気まずい以外の何者でも無いその中、零射は少ない知り合いの中で椅子を渡した

普段、お世話になつた先輩も涙を流している零射が人に見せたくない表情の一つ。それは泣き顔。それは逆に見たくもなかつた。

その中でも特に・・・女性のであつた

「つ・・・ やれやれ・・・今日は嫌な日だ」

そう言つて、彼は教室へと戻つた

その後、片付けをし最後に外で三年生を見送つた見送りが終了すると、零射らクラス一同は担任に集合を掛けられた玄関で呼び出される中、クラスメイトの中にはブルブルと足を振るわせ、文句を垂れるものも居た

そんな中、簡単な学活を終えると一年生らも下校し始めた

「さあ・・・帰るか・・・ん？」

ちょっと待て。咲からの返答がまだ聞いていない辺りをもう一度見回す。が、咲の姿はどこにも見当たらなかつた零射がハツ・・・とすると額に手をあて。あーあ・・。と声を上げた

完全に思い出したのだ、アレは二日ほど前の教室での会話だった

「私、卒業式の日に隣町いくんだよねー」

「で・・・返事よりも遊びを優先されたと？」

半笑いで禪が零射の家でそう言った

そこには零射・禪の他に紅、そして蒼紅、カイト（この二人は兄弟）が居た

零射が会長の不気味（阿呆）な会

何故、上手いものをわざわざ不味く食べる必要があるのか？　の会であった

会のメンバーから臨時に200ほど徴収し、その金を使って、リポビタンやら何やら不気味な物を使って不気味な物を作る会であったもちろん、それは全部頂く。

頂ぐルールは様々だが今日は懐かしのマリオパーティー4のミニゲームで飲む事を決定された

禪と紅はチームでやり、その他は単体でマリパとなっていた
2しほど出来た悪魔のドリンク（栄養剤多数 + C+Cレモン + レモンティー + とんこつラーメンの汁）

結局、この3分の1ほどは禪が飲む事となつた（飲んだら発狂したのであつた）

悪魔のドリンクを飲み終えると零射が一言呟いた

「外いかね・・？」

この時、零射にはある考えが浮かんでいた

時刻は5時ほど。適当に外を徘徊しようぜ。などと呟いて駅へ行く

そうしたらもしかしたら、咲と会えるかもしれない

そんな小さな陰謀を隠し持ちながら、零射がそう呟いた

メンバーはえ、などと苦い声を上げるが、零射がいーからー、と言

つて無理矢理外へと連れ出した
その時、蒼紅が零射へと近づき一言呴いた

「……咲んとこいきたいんだる」

ニヤニヤしながらそういう
マズイ・・こいつにはお見通しだつたか。と言つた表情をして零射
は全てを諦めた

「ああ・・その通りだよ」

腰に付けた、シザーバックからキシリッショガムを一個取り出し、
蒼紅へと投げつける

口止め量と言わんがばかりに渡すと、ふつ・・と笑つて蒼紅は銀紙
をはがしてガムを口へとした

自然と駅へと歩く・・・丁度その時、咲が向つた町からの列車が到
着した

「・・・おい、カイト。お前確認してこい」

近くの歩道橋から、蒼紅がそう言つ

カイトは何を？と言わんがばかりの表情だが、蒼紅がいいから！
と背中を押した

遠くの歩道橋から、虚しく走るカイトの背中を見て、零射、そして
蒼紅と禪はそれを見ていた
その時であった

「……やめた」

零射がそう言つ

ああ？ と蒼紅が声を上げた

冷静に考えろよ。 と零射が言つ

これつて一種のストーカーじゃねーか・・・。

と零射がようやく冷静になつた

カツカツ・・と駅とは反対側へ歩道橋を歩き始めた

蒼紅がはあ・・と溜息を吐くとカイトに手で戻つてこい。

の合図

を出した

カイトが不満げにそれを見つめると、もの凄いダッシュで歩道橋へ

と来た

男達は・・。 ゆっくりと歩道橋を降りていったのだった・・・

後々、咲のブログを見た所帰つてきたのは6～7時ほどだったので
どの道会えなかつた訳だが・・

それはカイトへ伝えないほうがいい。 零射はそう思つていた

月曜日 . . .

決戦の日とも言えるその日。 零射は妙に緊張していた

新しい靴を買つた為、それを持って学校へと行つた

その途中では禅とも出会い、一緒に登校してい

二人はiPodで音楽を聞いていた故か、会話数が少なかつた

こんな所を蒼紅に見られたらどうなる事やら・・・（一応生活実行委

員長であつた）

そんな事を思いながらも、二人は学校へと到着した

学校へ到着すると、卒業式の日と同じ様に零射は辺りを見渡した

・・・が、居る気配はなかつた

何故か安心してしまつた零射は教室へと入つた
荷物を置き、廊下へと行く

オンとノーブルの元へと行くと、まつさきに笑われた
何故か？ それは靴の事である

「—アワネエー。 かわいいぞ、零射」

白黒灰のチェック柄のコンバース。 オールスターの靴を彼は履いていた

うつせえ。 と零射が言う

続けて、これと虹色の靴しかなかつたんだよ。

と苦し紛れの言い訳をした（実際に虹色の靴があつたようだが・・）
その時、咲が登校してきた

二人の目線は合う事は無かつた

いや・・零射があわせなかつた・・とでも言つべきか

そんな表情を見ていたオンは、とつくの間に零射が告白した。 そ

の事を気がついていた

だが、何も言わなかつた・・。 それはオンの優しさであり、彼のイケメン度の表れでもあつたのだ

「・・・」

休み時間の度に辺りを確認する

返事はまだ来ない。

咲は俺の所へと近づいてこない。

咲の回りには・・いつもあの女がいるな
と、咲の動きを完全に見ていた

ただ、バレないようにチラチラと。 他所からみたらまるで覗きで

ある

咲にくつついでいる女・・それは零射の前の席の女子であり、零射の班と一緒にあった

そして、給食の時間。零射はその女にストレートに聞いて見る事にした

「なあ・・お前、しつてんのか・・俺の・・その・・」

ストレート。とは言いつつもさすがにそこまでは言えなかつた
察してくれたその女は、知つてゐるよ。相談に乗つてあげているもの。と言つた

何か余計な事を言つてくれていなかつた。・・と不安を募らせながらそつか。と零射は返答したのだった

給食も終わり・・五時間目

五時間目も終わつた。そして・・・帰りの学活であつた

その時、僅かにざわつく時がある

荷物を鞄へと仕舞うのだ

そのざわざわの中、零射はある事に気がついた

「・・・つたぐ。新しい靴はこれだから」

靴紐がほどけていたのだ

それを見た零射は、座りながら前へとかがみ、靴紐に手を掛けた
右足の靴紐を縛る・・。縛り終えると同時に、舌打ちをした
左足もほどけていたのだ。

そして左足の靴紐を縛ろうと、左足を上げた時
トントン。と一回肩を叩く感触がした

「・・・ん?」

顔を上げる。その先に居たのは・・咲だつた

「ナイシ シュー！ やつぱ先輩つまいつすねー！」

「ん・・ああ・・・・・」

3マーラインよりちょっと後ろ。 体育館のバスケットコートでシュートフォームを整えていた零射は後輩にそう言われた
正直、後輩に褒められた所で何にもならないのだが嬉しい事には間違ひなかつた

が・・今の彼はそんな感情はなかつた

ただ、咲の事だけが頭をめぐつていた

あの一言。 たつた一言で・・ここまで俺の心を動かせるもののか？

不思議、今までに感じた事のなかつた感情だけが零射を襲つていた
ボールが手に渡る。 ジャンプ。 そして手首を倒し、スナップを利かせる

スパツ。 綺麗にボールがネットへと包まれ、床へと落ちた
また、3ポイントである

「・・・あの一言だけで・・か

ボールが手に戻ってきた
そして、ジャンプ
手首を捻らせる

スパツ・・・

「ふん・・・」

3ポイントが3連続で入った。

零射はこの時、不機嫌そうな顔でボールを拾つた
そしてシューートフォームを作る
ジャンプをし、手首を捻らせるその時であった

「・・皮肉なもんだ」

スナップが効き、ボールが手から離れる
綺麗なフォームとは言えないが、しつかりとボールは飛んだ
綺麗な弧を描き、「ボールへと近づく

「気分が曇つてる時に限つて・・・」

「シューートが入りやがる」

スパツ・・・。

(後書き)

この小説は、ふらりの実話をほぼ100%トレースしたもので
吐き気がした方は、早くトイレへどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3360m/>

勘違いの産物～らぶらびりんす～

2010年10月8日23時17分発行